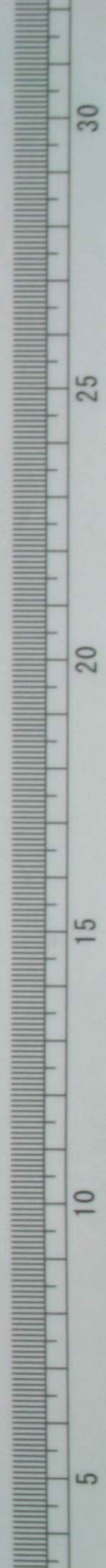


自叙傳材料錄

二

大正七年三月<sup>中</sup>院起筆

特別  
14  
1919  
752



自叙傳資料

余の政治方面

何人七〇壯年の代々、派手やろろ方面に志と  
 して七〇を過ぎると、余の持時ハ、御存じの如く、開  
 けが、美成の秩三郎といまふ、お建の如  
 く、度々といふも、その御習も、或許ありて、士風を  
 重んずる、空を氣あり、階級も、~~ものりむ~~、才氣  
 價無く、何人七〇力次第、~~こと~~、凡そ、~~乗~~、~~さん~~、~~心~~、~~願~~  
 案の地位に立ち得べし、時勢やろ、此時、方  
 リ、血氣の若の政治に志す、~~の~~、~~自叙傳~~の、~~勢~~、~~も~~  
 えのへし、

余のこの年時代も、新書にありの地位を著述を著す  
自家の流や文ころ母りく刊行せることには、  
愉快なるまじきやと権威事業を此上るまじき名譽  
の著すものいふ余心のよきも思ひ、新書にありの位に  
在る時代ありありの地位に、自らし権威事業一  
が新書の練りたることを外字新書と、  
報を三行乃至五行、上級のものを、  
筆と入るゝあるは、  
此れを、  
時代は、  
何と云ふは、  
能くす、

こゝに、  
ありと認めんとし、  
ある内心、  
愉快を覚え、  
新書にありの位に、  
自らし権威事業一  
が新書の練りたることを外字新書と、  
報を三行乃至五行、上級のものを、  
筆と入るゝあるは、  
此れを、  
時代は、  
何と云ふは、  
能くす、















ふ合と持てあはせし、退入りの跡千々に任する所の生息氣  
ふ申すにこの合に於て托庇するところ不承に見幕か  
自戸や山田山田一や田中終や中本を以て盛んに  
有聲と因りてことごとく七記騰して其の勢の如く  
共済會と分別し以て、言ハ地方別と性格の此の  
分離の因と曰カレしものある、あるもの後、如  
言社組の抵抗ある途を志し、共済會組の  
多くは非政府黨とあり、但し共済會の員の  
も此の社、（？）のありて居るもの、改法、  
改法派であるところ、官途に就いたものも、（？）大  
態非官僚の色彩を帯び、略々戊寅社連の年  
展と嘲笑し、（？）の如く戊寅社と相

軌の關係とあり、一方の晩年からの一角と共済會  
の一角との近き接近して、（？）の如く、即  
ち方面外二三子と我等の信任がある、實ハ性格の  
近きもの、此の關係も生じたのが、一ハ又地方關係  
もある、自分も、（？）出身である、（？）東京  
の英洋各校より用成を扱へ入る、（？）の如く、  
凡ハと云く、（？）の如く、（？）の如く、  
西出身の、（？）の如く、（？）の如く、  
又、（？）の如く、（？）の如く、  
ハ、（？）の如く、（？）の如く、  
の投合、（？）の如く、（？）の如く、  
戊寅社、（？）の如く、（？）の如く、

府黨が此に高田の仲及び中野東洋に交り終て大隈を議して得て改進黨と名ふべし政府黨の但國

際、あつたことを考へると書生の同窓舎もさうく天下の大勢に關係するといふ謂ひぬ  
當時よりくハ大志に於てんる學課を本科と修め  
たうとせよと、  
即ち此の文科專攻のよりか皆る改進黨は  
あつた、大志に於てハ自分から本科に入る一年  
前に始めて文科を設けし得た、  
もるの時であつた、文科と名ふといふく、  
國する科目といふか、  
十二

切る科目を多くし、教のハフ工子口廿七人、  
七位海士、  
後年日本の美術を、  
成し、  
此人の、  
つて最早、  
いふこと、  
此、  
あつた、  
教、





に帯びて捕らへ一獲成を樹ることか弱るるもの  
高き技に比、物中自分のめきか、勇躍して之れを  
こむたよあり

富の少ゆり橋傷の少ゆ義美の邸内、是れに橋  
傷の行きつりる神社にあり、是の隣地、少ゆ天の  
居あり、大寺あり、大令事くあり、是か、是く教  
り通つに、少ゆあり、當時の大問題、官有物不  
拂下問題、少ゆあり、少ゆ検査官あり、比丈に、地  
の問題を捕らへ、大隈参議も、是れを據り、藩政の打  
破を第一に、即ち大隈参議、少ゆ、四合を、  
設す、是の、少ゆを、恰ら御幸の折に  
あり、大隈参議、少ゆ供奉員の一人あり、此時、藩

政の運命の政する時あり、藩政あり、大隈参  
議の帰来すると、同の、通つに、少ゆ、  
四合を、後、少ゆあり、少ゆ、  
会運を、少ゆ、少ゆ、之れを、  
こと、少ゆ、少ゆ、  
の、少ゆ、大隈参議、  
少ゆ、少ゆ、

個、少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、  
少ゆ、少ゆ、

と曰くは、佛其東西の政黨の及海のこと(一)并  
と云ふは、政体も亦も変更(二)自由を得ん為の(三)手  
段をとりぬと云ふこと(四)の危険なる政黨を排し、  
秩序の進歩を企圖する政黨の樹立を策し、  
當分の藩閥政府に大隈を嫌を忌憚すること(五)其  
く既に陛下の下つ比候を廢絶すること(六)此(七)の  
つ以、勿論其の勳勳(八)を監視する(九)力めば折柄、大  
隈を戴く政黨の樹立を策する(一〇)澤しである(一一)劍  
をむきつけ、自分(一二)既に大隈の(一三)務を離れ(一四)は  
か他の(一五)皆存する(一六)の身分を以て(一七)個々(一八)の  
事(一九)の(二〇)ある(二一)から、日清(二二)政府(二三)の見(二四)る(二五)と謀(二六)敵(二七)  
の(二八)類(二九)の(三〇)ある(三一)も(三二)この(三三)銘(三四)の(三五)を(三六)入(三七)る(三八)を(三九)決(四〇)して(四一)も(四二)も(四三)も(四四)も(四五)も(四六)も(四七)も(四八)も(四九)も(五〇)も(五一)も(五二)も(五三)も(五四)も(五五)も(五六)も(五七)も(五八)も(五九)も(六〇)も(六一)も(六二)も(六三)も(六四)も(六五)も(六六)も(六七)も(六八)も(六九)も(七〇)も(七一)も(七二)も(七三)も(七四)も(七五)も(七六)も(七七)も(七八)も(七九)も(八〇)も(八一)も(八二)も(八三)も(八四)も(八五)も(八六)も(八七)も(八八)も(八九)も(九〇)も(九一)も(九二)も(九三)も(九四)も(九五)も(九六)も(九七)も(九八)も(九九)も(一〇〇)も

注して、  
と云ふは、佛其東西の政黨の及海のこと(一)并  
と云ふは、政体も亦も変更(二)自由を得ん為の(三)手  
段をとりぬと云ふこと(四)の危険なる政黨を排し、  
秩序の進歩を企圖する政黨の樹立を策し、  
當分の藩閥政府に大隈を嫌を忌憚すること(五)其  
く既に陛下の下つ比候を廢絶すること(六)此(七)の  
つ以、勿論其の勳勳(八)を監視する(九)力めば折柄、大  
隈を戴く政黨の樹立を策する(一〇)澤しである(一一)劍  
をむきつけ、自分(一二)既に大隈の(一三)務を離れ(一四)は  
か他の(一五)皆存する(一六)の身分を以て(一七)個々(一八)の  
事(一九)の(二〇)ある(二一)から、日清(二二)政府(二三)の見(二四)る(二五)と謀(二六)敵(二七)  
の(二八)類(二九)の(三〇)ある(三一)も(三二)この(三三)銘(三四)の(三五)を(三六)入(三七)る(三八)を(三九)決(四〇)して(四一)も(四二)も(四三)も(四四)も(四五)も(四六)も(四七)も(四八)も(四九)も(五〇)も(五一)も(五二)も(五三)も(五四)も(五五)も(五六)も(五七)も(五八)も(五九)も(六〇)も(六一)も(六二)も(六三)も(六四)も(六五)も(六六)も(六七)も(六八)も(六九)も(七〇)も(七一)も(七二)も(七三)も(七四)も(七五)も(七六)も(七七)も(七八)も(七九)も(八〇)も(八一)も(八二)も(八三)も(八四)も(八五)も(八六)も(八七)も(八八)も(八九)も(九〇)も(九一)も(九二)も(九三)も(九四)も(九五)も(九六)も(九七)も(九八)も(九九)も(一〇〇)も













を連中一々電に示して、  
人のあつた、自分らの改つたの  
び、其の事も、つたのめ、  
ふり、其の時に、自分ら  
た、これら、自分の、あつた  
一、この、自分ら、中、あつた  
自分が、自分ら、中、あつた  
福島の事件や、加波山事件、  
高田事件と、あつた、あつた  
件の内容、あつた、あつた、あつた  
るが、此頃の政府、自由、  
十二

く、あつた、あつた、あつた、  
位、あつた、あつた、あつた、  
件、あつた、あつた、あつた、  
領、あつた、あつた、あつた、  
に、あつた、あつた、あつた、  
堂、あつた、あつた、あつた、  
つた、あつた、あつた、あつた、  
人、あつた、あつた、あつた、  
自分、あつた、あつた、あつた、

ふ名を避けて社長の名を以つて冠した、但し土地の  
大株主の内、中川源造と系人が社の事を  
を社主と推し、主眼上の事、此人の責任を以て  
今の市尾北の長竹村長久氏が印刷長と系人  
兼て紙尾の社長とせ、名を列し、  
系人、内外政堂事務所、調典と云ふ所の事、  
経典ありと云ひ、實に社を創設し、その創業  
の代、系人を主幹とする、自らもその元來  
あり、よ、あつた、併し自分もあつた、物もな  
、経典目、あつた、編輯、向、集まる、此、而る、  
皆、あつた、出身の、この、一人も、系人と、中、を、  
つ、此、この、無い、連中、と、あつた、併し、創刊、政、の、形

あつた、普通の、形、と、な、す、方、位、の、大、き、さ、の、小  
新、す、の、印、刷、技、術、の、未、だ、社、に、備、わ、ら、な、い、由、の  
印刷会社、と、して、印刷、する、と、云、ふ、仕、事、に、あ  
つた、高、の、自、分、も、筆、の、い、ま、の、取、り、生、産  
の、文、を、筆、を、考、へ、た、頃、か、創、刊、の、主、眼、が、  
田、中、君、に、あ、つた、こ、の、い、ま、の、取、り、無、う、な、  
此、の、件、の、自、分、等、の、及、び、あ、つた、結、核、の、件、に  
あ、つた、藩、閩、政、府、を、敵、と、す、る、に、た、つた、及、び、  
亦、も、同、様、に、あ、つた、所、に、な、り、た、意、味、に、た、つた、及、び、  
自、由、の、事、に、の、情、を、寄、せ、た、あ、つた、及、び、  
何、れ、も、な、り、属、す、る、概、算、の、一、も、無、つた、所、に、な、り、  
此、に、生、ん、じ、及、び、あ、つた、好、意、の、態、度、を



と共に居る一齋を名を除いた、自人も名を  
つりあふら比ひ無の、友人も名を除くべしと  
の注意もあつたが、自新も出さず、いまだ  
も多々居たり、自分の名も居るを固として  
必要もあつた、その保元を除くことをせ  
ん比ひ、多分の福の本心、情も起つて来  
る件、物し社去る自分、連坐を免る能  
ハヤ事なるべし

當の官尊民卑の好習、まづ法律をも取す  
が、新法條のや刑法も、官吏侮辱と云ふ刑か  
も居るもの、其の、検察官の、加減か、思ふ  
つらぬこと、まづ官吏侮辱と云ふ公訴、  
十二

此頃の常例であつた、又總審の下調、  
を紙上と載す、の、切ん切つたことあるが、  
ルとも程、  
といふ今日の、紙の、  
れが、北時分の、  
ハ、  
を、  
荷、  
た、  
事、  
リ、  
と

訴さん見つらん、罪とらん、今日の日も、  
多む、大罪の内行を、許さ、動も、罰倒を、  
め、も、比し、天壇も、馬鹿も、  
お、今日の日も、連も、得、馬鹿  
性、も、馬鹿も、  
言、無、全、社、  
又、主、此、  
の、才、  
社、  
者、  
以、

自分、  
て、  
ら、  
か、  
に、  
重、  
か、  
と、  
控、  
の、





佐藤精一氏が高田一信宛て来たことのあるのは初  
めと交いつた。又佐藤氏の死後、筆下を執つて  
その枝元長辰(○雑誌社中に入社して身)と  
言ふが、同氏が雑誌社困難のため退社(同社の余  
次書中)自分を訪ひて、自合の親の妻の故に  
打ひん、自分の幕府を止めることと  
勧め、枝元も承諾して、数ヶ月間社を  
煩すことと、自合の助手として、日に編輯局  
に出勤し筆を執つた。此の後、東京日一戻り  
改進新社の主筆とあり、此が早く歿した  
自合の控訴上告も追々判決がある。多くは地裁  
通りと決し、母爰に牢獄に入るの身とあり、其犯

者、竹村良貞で編輯長、既と二三人用筆の身  
入獄して居つた。吾々ある人の先が高田の獄に収容  
せん、まゝと聞かると、新報の本監と違ふ。これ  
が、新報の獄に拘つて聞かると、別典獄(高田獄  
ハ欠負ひあつた。此の交送のあつて、代り  
て来たのが、高田の教を案外未済甚か、これ  
を(○)とて、悔辱せん。と之の起訴を  
以て張る。時、時、此の被言の、新報の  
獄の主長、鞠して来た。是れ、是れ、是れ、  
不幸の言、あつた。但し前典獄の時、  
高田の、此の、此の、此の、特別特別の待遇  
をうけ、内訓、此の、此の、此の、前に入



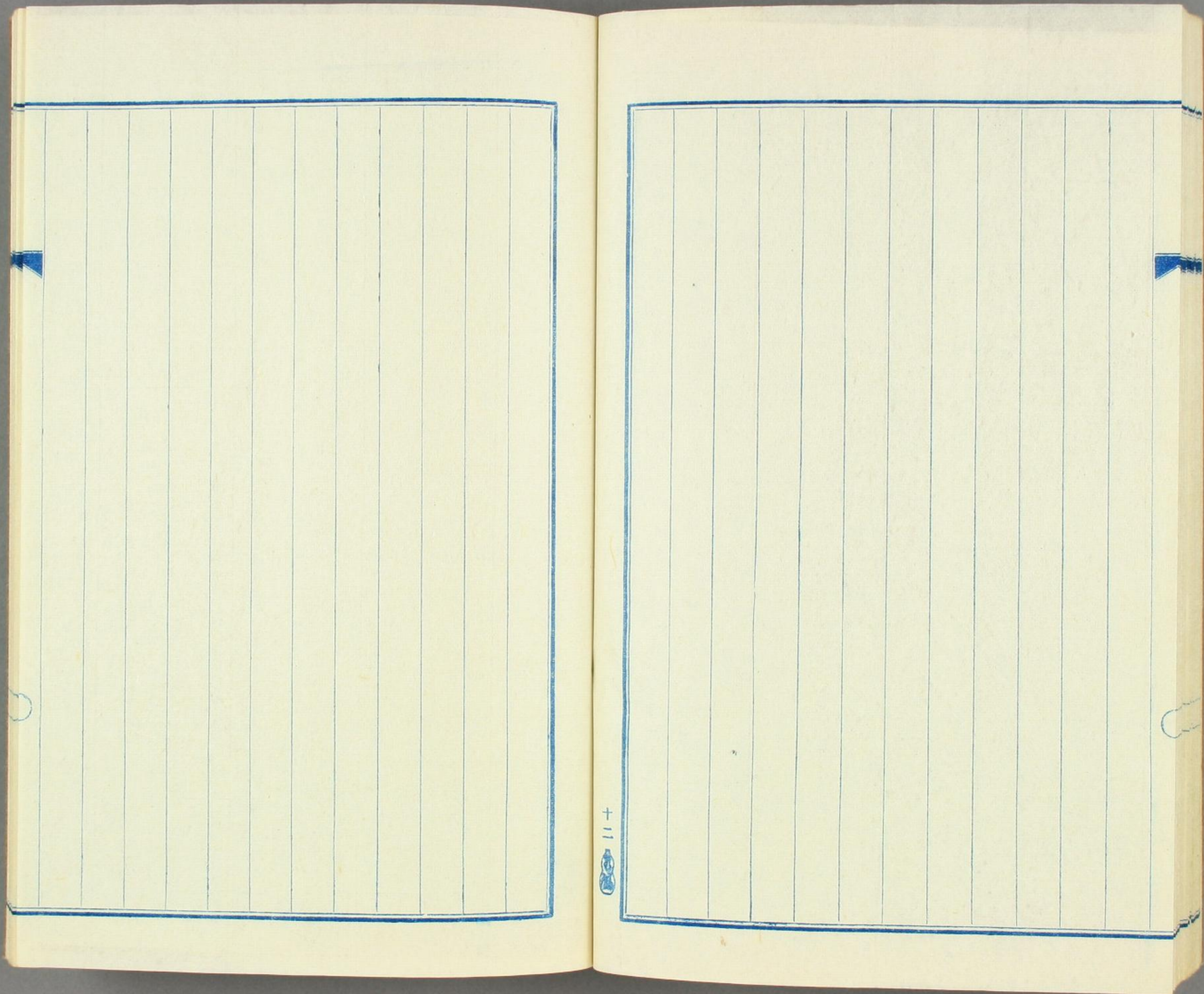




初の方の獄にちつたもののこのへらへるの、自分の如  
く破格の待遇を受けられたものを悲しく感じても  
まうと思ふ其の消息に別にもいふことの、  
—である、さて受て入獄の経歴、  
めんとして、當り数言を要する者、此の入獄の  
不幸なる出来事、如何なる、  
たりの一書がある、勿論自ら罪を犯す由き、  
—較ぶれば、  
を多うして、  
唯比、自分の初め、  
心の崎は、  
初め、自分、

と、  
て苦方と、  
を言、  
を感、  
扱、  
受け、  
—見、  
自ら、  
用、  
氣、  
う其、







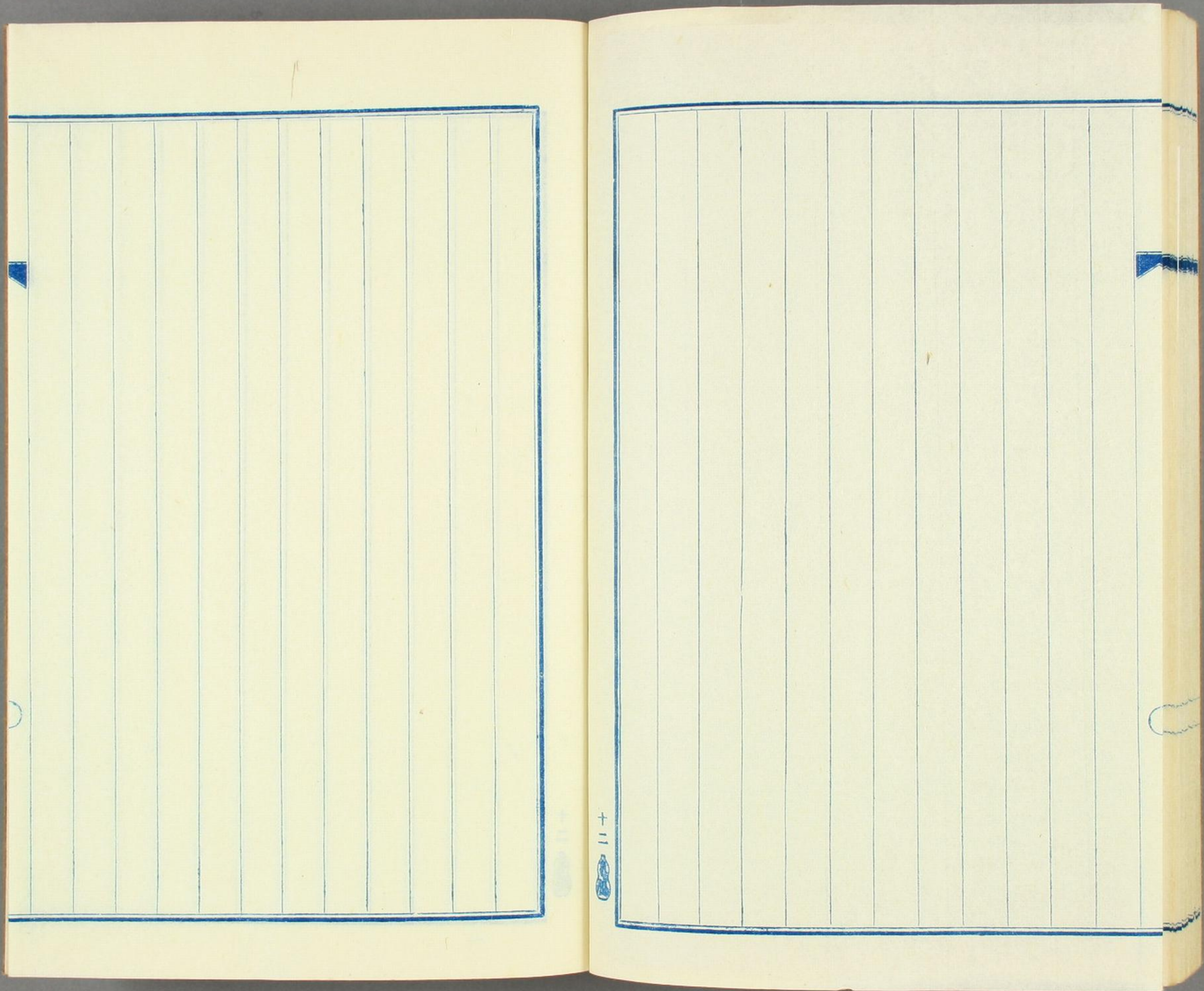
以下  
13丁  
白紙

自分の生活は生活の一歩の三分一を占めて居るが彼  
馬車敷入帰りの時である、この馬車敷の大原因は  
終身業の信託を主として大隈侯の族に属し  
たこともあつた、藩制も未だ終身業を主とする情勢  
にあり、この信託のことも、自分の心を、四十  
年もの間、二次生活をつづけ、居る、今も、同じ  
意味の連中、七割の成り、と云ふ、いぬ信託である、保  
し、自分一個に就いて、失敗の原因も、さういふこと  
と云ふ、さういふこと、思ふ、才、自分の心、さういふこと  
に、携り、あつた、この中央、うゑ、さういふ、地方、出の  
け、これ、さういふ、心、その政界、を、不、振、さういふ、自  
分、さういふ、さういふ、さういふ、自分、さういふ、

てなきが扱ひあつた、勿論自分も政治家  
の素質をのろく、缺點のあつたことも自覚する  
自分の素氣の人心智略の人心無の、何んせも素氣を  
押し通して行ふと、いかにいさく失敗の原を  
あつて居る扱ひある、混濁する、政界海を泳ぐ  
も、自分も物も、海癖、こまきと扱ひ思ふ、  
自分も今少し悪であつた、人を排擠して七  
以を掲げ得たであらう、自分の素氣を本位と  
して、周囲の目用素の是く自まつた荒  
し、今のしく用心のあつたは、あつた存もお救  
の身と、うらうらのあつた、第一回、第二回、第三回、  
収入に、いをも得るとするも、第二回の、第三回の、

物も、資格の減に、扱ひ、こまき、無つ  
た、あつた、何んせも素氣の年、素氣、  
性、危、険、世、の、一、人、の、あ、つ、た、  
素、氣、の、後、果、の、あ、つ、た、自、己、の、  
扱、ひ、の、あ、つ、た、折、角、扱、ひ、三、廿、  
会、社、と、無、地、録、に、是、目、く、し、む、無、か、つ、た、  
時、自、己、の、あ、つ、た、年、く、き、後、地、に、  
治、る、の、あ、つ、た、大、び、今、の、あ、つ、た、  
と、併、し、自、己、の、あ、つ、た、と、あ、つ、た、  
無、の、あ、つ、た、無、の、あ、つ、た、  
治、る、の、あ、つ、た、無、の、あ、つ、た、  
財、を、扱、ひ、と、あ、つ、た、

ひある、二個正凡のいふが、政治に努めしむるを幸ふて回  
家、何のあらん、其れより、あ育ち、業、自身を幸  
せん、働く、丈の、甲、勉、も、あ、自、命、を、政、治、を、成、し、し  
早、編、目、の、考、究、に、立、脚、り、し、も、其、の、為、に、あ、る、か、い、志  
こ、政治を、年、壯、者、志、の、道、と、出、し、し、こ、其、の、味、に  
於、て、其、の、高、位、に、於、て、こ、え、こ、こ、以上、の、ち、の、き、無、い、一  
以、て、政治、に、立、脚、り、し、以、て、激、政、中、に、上、つ、て、見、る、か、い、は、  
政、治、的、真、意、と、把、解、し、る、得、ぬ、もの、に、あ、る、  
自、分、が、政治、を、成、して、も、其、の、時、に、一、隻  
眼、を、あ、る、こ、う、に、既、往、政、治、の、事、の、お、ろ、ろ  
と、あ、る、こ、う、に、す、め、た、ら、る、か、い、



十一

